

性倒錯を示した女兒への心理療法の試み

○大島晴子 伊富貴弘子

京都女子大学 発達クリニック

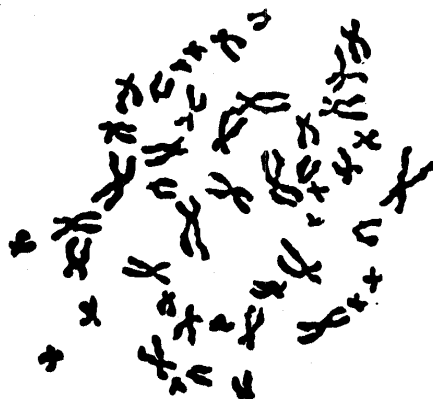
われわれは、幼児期の半ば頃から次第に特異な男児化への傾向を露わにしてきた6才女児の症例を体験したので、ここでは特に男児化への経過を中心に報告したい。

この子どもの家族的背景には後述の如く、粘着性性格者¹⁾の発症と嫉妬妄想をいだくにいたった者が1名いる。生育厂をみると、この子どもの妊娠時母親に疾病・外傷なく満期安産で、その後の発達は10ヵ月まではほぼ順調である。生後10ヵ月の時に重症の麻疹に罹患し、それ以降時折小発作をみるに至り、同時に多少の精神発達の遅れが認められた。たまたま父親から井戸に宙づりされるという精神外傷的事件もあってか、この子どもは次第に男子的な嗜好、具体的には可成り強いベニス義髪を併いっ、男児様服装を好みだし、さらにこれが動作・態度・コトバづかいに及び、最終的には全人の男児様特徴を示すに至ったものである。なお、当発達クリニック小児科を受診時一般的神経病理学的検査では特に異常は認められなかったが、EEGでは頭頂部、側頭部に両側性異常波がみられた。また、この子どもの知的側面はやゝ遅滞気味であり、サアテストのバラツキが大である。性格的には気分易変、衝動的、粗野、リズム感がわるい点、さらに些細なことにムどくこだわる等粘着性気質が顕著である。いずれにせよ、現病厂、EEG所見から、この子どもが何らかの器質性脳損傷をもつものであることは否定できない。また男児化傾向については大学病院婦人科に紹介したところ、婦人科学的に特に半陰陽の兆候もなく、染色体検査に於ても正常女子タイプに属するものであった。ここでは、この子どもの男児化へのメカニズムを中心に考えてみたい。

まず、あげられることは家族的背景にみられる特異点である。すなわち、両親の家系はどちらかといえば、表面的には対称的であるように思われるが、源泉的特性に関しては類似のものといつてよい。加えて、かつて母方の祖母が夫の放蕩によって両々の日々を送ったのが、丁度、その娘に再現されたかに見える点も特記すべきである。また、この子どもの出生前からの家族関係には特

異なものがある。具体的には母親は父親の放蕩と、彼女を一人の労働力としか見ないような祖父・小姑に気がつかないながら、野良仕事に精を出さざるを得ない状態におかれている。前述のように、この子どもは生後10ヵ月で重症の麻疹に罹患、その後小発作をみると共に多少の精神発達の遅れを示している。これは母親がいう程ではなく、むしろ、彼女の不安の投射とみなくてはならない。しかもその不安が真底この子どもに対する憂慮からのものではなく、母親の対人指向性は専ら夫、祖父母におかれ、子どもへのかゝり方はごく反社会的なものであったようである。一方、この子どもは生後5ヵ月で母乳から人工栄養に急激に切り換えられた際のさまざま不安は非常に強く、具体的には哺乳ポンへの異常な執着と成ってあらわれ、更に、この現象は丁度その頃従弟の誕生を一つの契機として、一段と増悪している。そして同時に、この子どもは従弟と原始的感応現象といつてもよいほど強く彼の行動を取り入れることにより、あたかも失われた母親との共生関係を恢復せんとするかの如く、男児化への傾向を見せはじめたといつてもよい。このような傾向を強めた別の原因として、両親間の関係を指摘することが出来る。すなわち、この間母親は再三実家へ逃げ帰っているが、その度に父親は食事もとらず、仕事もせず、半狂乱と成って妻を探し求めているほど、両親間の麻のごとくに乱れもつれた。アンビヴァレンツ²⁾の人間関係が、ますますこの子どもを放任せざるをえぬ結果となり、この子をして従弟との共生関係をますます抜き難いものにした、という事が出来る。更に、父親のこの子どもへの仕打ち、殊に井戸につるべ落としにした精神外傷は、父親への怯えというよりもこの子をして嫌悪に向かわせ、また一方この子どもの母親への思慕は、ネガティブな形、つまり母親をして困惑させる方向に、つまり粗野な叔父の態度をとり入れ、男児化への傾向を一段と増悪させたように思える。

S.K. ♀ 8j



A1



A2



A3



B4



B5



C6



C7



C8



C9



C10



C11



C12



D13



D14



D15



E16



E17



E18



F19



F20



G21



G22



X X